

みちゆき

松原

俊太郎

人物

声(A)

声(AA)

音(O)

音(OO)

浮浪者

屍体

蠅

タツコ

そこは、どこにでもある風景、ひとつの場所であり、四本の椰子の木（上手から木1、木2、木3、木4）が等間隔に立ち、舞台中心にはなにもないように見える深い穴、黒い穴、なにもないように見えるということのはのっぺりとしていて平面的な穴があり、舞台後方には幾重にもカーテンがかかっている。

ここにはひとりの声と、もうひとりの音、そしてもうひとりの声と、もうひとりの音がいてひとりの声をA、もうひとりの声をAA、ひとりの音をO、もうひとりの音をOOとする。四人は群衆に取り囲まれている。群衆は見えないものであり、見えるものであり、そこにいて四人を取り囲んでいる。その境界はない。四人とかれら、わたしと四人、わたしとかれらがひとつになることはないため、何かしらの境界はある。身体やら、家やら、壁やら、海川山やら。ただ見えないだけ。ただ見えないから、境界がないからといってただやみくもに恐れ、あるいは軽蔑して距離をつくりだし、あるいは愛し合ってひとつになろうとしても何も変わらないので、その薄灰色の暗がりからかれらを、人形を取り出してきてその使い古されて長い年月、愚か者の排泄物に塗れてきた人形の頭、首、腕、脚、衣服から何から何まで組み立て直さなければならぬ。ただし、この劇は喜劇であって、悲劇ではない。悲劇はすでに起こった。それは沈黙を強制され、善人を装う善人に拙い嘘へと改変された。そんなものはもういらぬでしょう。幕が降りれば、わたしは忘れ去られなければならない。

二人の人間はすでにそこにいる。木2の前にO、木3の前にAが座っている。

O どうして？

A どうして、初めからこうだった。ことばだけだ。

O ことばの次はなに？ 身振り？ いつの、まにやら。すぐに忘れて。ずっとここにいたの。わたしたちは。わたしはそんなこともわからなくなってしまったの。ここはいつたい、いつのまにここになったの。

A あなたのよく知っている場所だ。いつもの、見慣れた、歩いてこれる秘密の。

O 平和にこけに、ちがう、惚けにされたの？ あなた、このごろずっと逃げる、逃げなければならぬかもしれない、逃げなければならぬっておまじないみたいに言ってたよ、夢の中で。

A 殺されるからだ。敵だらけのあそこにぼんやりと突っ立っていればただそれだけの罪で、存在を消される、埋められることもなく。でももういい。逃げるのは。息ができなくなる。わたしたちはここで息を紡ぐことにしよう。

O 敵なんていなかった。あそこには人間しかいなかった。わたしたちの友だちは？ かれらは逃げたの？ どこにも見当たらないけど。まるで初めからいなかった子どもみたい。

A かれらもまたいずれここに来る。来ないなら来いと言うまでだよ。

O わからない、わたしたちがなぜここにいるのか。なぜあそこじゃだめだったの。

A あなたはわかっている。ぼーっと見ていると場面がいつも簡単に変わる。（首を左右に三回振る）おかしい。いつも自然に、装われた自然ね、当然のように自然に三歩か五歩歩いたらきらきら輝く海があつて隣には赤いワンピースを着た女がいる。（笑う、手が空を切る）現実ではない。美術館でお話するのが現実？ みんな

な白いライン鼻から吸い込んで脳味噌（咳き込む）言わせて粕味噌になってしまった？ 味噌と糞はもうたくさん、現実的に、いや現実には、夢の逃げ道の現実ではなく。フィクションとノンフィクションと夢と現実で区画された街、どこで息を吐けばいい。物語、物語、（息切れ）向かいに座ったあなたたちがそれぞれ持っているんでしょ？ フィクションで塗り固められた、こう言うと（咳込む）あるかな、あなたたち自身の物語を、あなたたち自身が（くしゃみ）生きているのにこの部屋はなんて狭苦しい、重苦しい、空々しい、ところなんでしょう。真空のほうがまだましだ。（Oは忘れていたかのように深呼吸をする）後生ですから、お願いしますから、わたしは狂っていない、何にもしませんから、もう、壁はいらない。壁を壊しましょう。ベルリンみたいに、とはいかないが。こちらへ来てください。そこでは洪水が起きるかもしれない、人力圧死するかもしれない、自由な角度から平手が飛んでくるかもしれない、から。

O そこなら大丈夫、とは言い切れない。安全な場所はない。彼は死んだ。

A 霞のない、光のあるところでそれを見ることができない。彼は死んだ？ 彼は死んでいない。

O いったい何が正しいって言いたいの？ あなたが真実なの？

A いやいや、わたしは間違いばかり言う。しかし、それを放っておくことはしない。重要なのは、ひとつの場所だ。露に濡れた草原、視界を超える海、なだらかに、突如として険しくなる山道、わたしたちの街、ここですべてが起こっている、起こらねばならないのではなく、すべてがそこにあるわけではなく、すべてなど存在しないにも関わらずすべてだと言われてしまうような場所はひとつしかない。

O なぜひとつしかないの？ いやね、ひとつでなければならぬ、ひとつにまとまらなければならぬって言われてるみたいで。

A がっかりすることはない、そうではなく、わたしたちがひとつの場所となるん

だ。決してひとつにはならず、はなればなれで、ばらばらの不完全な断片のまま。

それは世界は素晴らしいということじゃないか？ 希望はない、絆もない、世界は素晴らしい。ただ、そのことを語りたいわけではない、そのことを語ってもそれは完成しない。それを意気込んで語ろうとすればうずくまって足の爪を噛んで泣いているヒトたちを無駄に勇気づけてまた同じ凸、いや凹に突き落とすだけ。

O じゃあ、なぜおしゃべりしてるの？

A あなたとわたし、わたしたちのため。

O わたしのため？ また嘘。

A そう、あなたのため。わたしのため。わたしたちのため。

O 頼んでない。祈ってもない。

A その不幸に歪められた無表情はなにも語っていない、と言われつづけてきたんだろう。わたしの顔はどう？

O わたしはしあわせ。

A わたしもしあわせだよ、これがわたしの、わたしたちの求めてきたものか？ カラスが崖から羽ばたいた瞬間、それはくるしみになる。

O くるしみ？ ちがう、愛、ちがうちがう、ちがう愛、ちがう、しあわせ。あたしは今日も明日もしあわせ。

A あなたはわたしの話を聞きたくないのか？

O ええ、つまらない。なら。

A それでは話してもいいかな？

O ええ。それ。なら。

A さて、なにを話せばいいかな。話すべきことなんてない、言いたいこともない、いや、たくさんある、語りきれるかな、あなたも話すんだよな、でもいつも面と向かっていざ話そうって口を開いたときに話したかったことを忘れる、思い出し

でもそれはすでに別のことになっている、それはそれでいいとして話したとしてもうまく話せない、そんなこと言いたかったわけじゃないんだがな、また話せない……ああ、愚図愚図してるとできなくなっちゃう。ああ。

舞台後方のカーテンをかきわけて浮浪者が現れ、徘徊する。

浮浪者 今日も仕事。明日も仕事。休みなく。いつもどおりやってくれ。おまえもやるんだよ。おれはもう、働きたくない。働かなくていいことに今朝、気づいた。働きたいやつらは他にたくさんいる。金ならある。でもな、おれたちは働かなくちゃならないんだ、そう言われてるんだ。あいつはどこに行った！ あいつは死んだ。おかげさまで世間は大混乱だが、おれはもう、すでに働いている。汗臭いあんなの隣でな、おれはあんなの子どもじゃないんだ、主人を選ぶ権利ぐらいあるだろう！ ああ、いやだ、いやだ、あんなの隣でこうやって突っ立って、なんなら逆立ちでもしてやろうか、息を吐いてー、吸ってー、なんとも重労働だ、これでもおれが働いてないと言えるのか？ おまえは働いていない、怠け者だって？ あんたに言われたかないね、誰だってここで呼吸することぐらいできる。あいつは死んだのか、それにしても。それにしても、だ、おれが呼吸するのは、おれにしかできない。他の誰もおれの呼吸をすること、おれに呼吸させることはできない。この呼吸はおれのものだ。おれのどんな機械にも触れさせない。ああでも、働かなくちゃいけない！ さあ、立ち上がれ！ おれの腰！ 言うことを聞け！

浮浪者は立ち上がると下手へ消えていく。Oは両手で両耳を覆っている。AAがAの正面から現われ、両膝をべったりと床につけ、頭を落とし、前方に両腕を伸ばす。土下座しているように見えてはならない。

A わたしはあなたに。この声はどうでもいい、聞こえなくてもいい、ただ見てくれれば。ここにいてくれさえすれば。それはわたしのしあわせなのだが、そこはもう話した。わたしのしあわせはなにもでもない。犬がやってくるはずだ、わたしたちの足元へ、首を擦りつけてくる。蹴飛ばさないでやってくれ。

A A もうたくさん！ もうたくさん！（伸ばした両腕を地から離してゆっくりと上に上げる）

A あの人はどこに行った。（微動だにせずに）わたしたちはおしゃべりつづけなきゃならないのに。まあいい、すぐに戻ってくるさ。ああ、あなたか。ああ、ああ、そうだろうよ、築きあげてきた積み木の塔が一瞬にしておが屑になりやあなたは生きていけないものな、わたしが代わりになってやればいいのだが、わたしにはなにも失うものもないしあげるものがない。あなたがわたしをあなたに与えてもあなたはいつときの空腹を満たすだけ。

A A それでいい。なんでもいい。（右手と左手でグーとパーを繰り返す）

A わたしが欲しいのか？ わたしの目の前でそのこもった匂いのする股を広げるのか？

A A そうだ！ あなたとあなたの後ろにいるやつが（それぞれを指差す）、左でも右でもいい、あなたと似たものならなんでも！

A いただけないな、わたしだけならまだしも。

A A 結局、なにもくれない。

A 煙草をやる。

A A ぼくは煙草を吸わないんだ。（右手で否定の手振り、顔を上げ、すぐに下げる）吸い方がわからない。なぜ吸うのかわからない。なぜ煙を充満させるのかわからない。

A じゃあ、わたしが吸おう。

AA あなたが煙草を吸うと静けさが増す。誰もいなくなる。

A そういえば、静かだな、ここは。静けさは敵か味方か、静けさが嵐を教えるが、呼んでいるとも言える。なにが起きてなにが失われなにも、残らない。

AA あの人は、ぼくがあの人に向かいに座って煙草に火をつけ、まあるい煙を吐き出すと、あの人は頬を膨らませてふうーっ、ふうーっ煙をあらぬ方向へ吹き飛ばしちまう、その顔は忘れられない。よく笑ったね、ぼくが一吸いするたびにふうーふうーっだ、あの人はぼくが煙草を吸うのを認めたけどふうーっはあの人なりの対応だった、それにしてもよく笑った。ああ、あなたが煙草なんて吸うから！（右手を突き出し、左手で手首を抑え、右手のひらの線を凝視する）

A 縦の線が入ったと思ったらすぐ横の線か。煙草は吸わないんじゃないなかったのか。

AA つまらなくなつて、やめたんだ。（元の姿勢に戻る）

ホワイトノイズが空間を覆う。姿の見えない浮浪者が声を出さずに笑う。Oが耳から手を離し、虚空を見上げる。

O 海？

A ちがう。群衆が喚いているだけ。いろいろな音が見えない手に均されて鳴っているだけ。（Oはまた耳をふさぐ。OOが舞台後方のカーテンの隙間から現れ、木1の下でうつ伏せになる）

AA うんざりだ。もう、なにかも。なにをつくっても藻屑にもならず消える。目の前からすっきり。失われたものは失われたもの？

A あなたはなにかもを知らない。知らないことであんざりしている。

A A 知ればいいのか？

A 知ればいい。

A A 死ねばいい？

A 死にたいなら。

A A 死にたくなんかない！

A 死んでるんだよ、ここは静かだ。

A A じゃあ、死んでいるあなたをくれ。

A ああ、あなたにわたしをやるわけにはいかない。あなたはあなたとあなたと似たあなたに分け与えられる。分割譲与だ。あなたはここに連れてこい。ここに来いとかくここに来い。宗教なんてありふれたものじゃない。信という言葉が出てきただけだ、あなたはここにきて初めて考えることができる。

A A さて、なにを考えたらいい？ 腹が減ったな。もういい、煙草をくれ。

A 和睦のしるしに。

A A 音楽はないのか。ここは静かすぎるぞ。ぼくたちの国は――

A ぼくたちの国、なんてものはない。大国の野外簡易便所だ。ここの静けさはあのこの喧騒よりはいい。相も変わらず単調で空恐ろしい四拍子、ドン、ドン、ドン、ドン！ どこを歩いても同じテンポで歩くことを強制され、アヘンでつくられた無数の直立不動に見えながらも地中で清潔なひげ根を増殖させる直方体に吸い上げられる。いとも簡単に吸い上げられ、循環器にたらい回しにされていつのまにか消えてなくなる。

Oは耳から手を離し、足、腰、背中、腕、手、肩、首の順に骨を鳴らす。

A (A Aに手を差し出して、届かないが) あなたたちは舞台を眺めてあいつは叫

びすぎだ、オーバーだ、感情的にすぎる、狂っている、不自然だ、気持ち悪い、こんな人間じゃないと言うだろう。それが起きているのがここだから。ことそこ、ケツの痛くならない安楽椅子に座って自分たちのいるここはそこではない、かれらは演じているだけ、お芝居をしているだけ、わたしたちはそこでげいじゅつ的なスポーツを見て、笑えないギャグの応酬を見て、泣きたいだけなのだ、と主張するがそれならここはいったいどこなのだ！（A Aは顔を上げて左右を確認し、元に戻る）もういったん見てしまったらいくらそんなふうな主張を持って眺めていたとしてもそれらは瞬く間に瓦解し、そろそろと腰を上げてこそ泥のように身をかがめてそくさそそそとハウス！へ逃げ帰ろうとしても叶わない。ジェットコースターのどうやっても動かないベルトのようにあなたたちはすっかりそこに固定され、拷問を受けている気になるかもしれないがそこで起きているのは拷問ではなく、洗脳でもなく、ただあなたたちの身の回りにある見えない世界、自動機械たちのアーバンでスムーズな運動を観戦しているだけ。見えないものは氾濫していて表層者たちは言葉にしたくないものを見えないものといって嘘をついて金をもらっている。金はそうやって回れ回れ、ついに戦争。（この間にOが迂回を繰り返し、再び元の位置に戻ってくる）

O 関係ない。

A それはここで見えるものとなるのに。普段、料理をして洗濯をしてセックスをしているときには見えないものが見えるようになるかと怯えるだろう。そんなものが見たくなかったかもしれない。できれば死ぬまで見えるものだけの世界で見えないものことは考えずにチューリッヒのパラマウントベッドで安らかに眠りたかったかもしれない。

O じゃあなぜ、あなたはここに来たの？

A 言っただろう、ピクニックだ。ヒトヒトヒトから伸びる腕から、黙ることを知

らない尖った口々から、考えなしから、おだやかな嘘っぱちの平和から、悲惨な戦場から逃れて。

O もううんざり。ただあなたとわたしと、そのあとやってくる友だちのことだけ考えたい。そこから始めたい。でも新規蒔き直しをするねじはどこかに置いてきたみたい。どこから始めればいいのか。

A 際限なくあなたを駆り立て、間違っているものは忘れたと思う。あなたはもう忘れられない。安心してほしい、ここに裂け目なんてものは存在しない。

O 思い出せない。どうして忘れてしまったの。

A ここには裂け目が必然的であってわざわざ裂け目があるんですと口走る必要はない。忘れたところにやってくるんだろ？ もちろん裂け目と言いたければ言えばいいが、わたしの聞きたいことはあなたのことであって裂け目ではないし、裂け目はうまく話せないかぎり裂け目。裂け目はあなたに内包されている、胸底に炎天下に吐き捨てられたチューインガムのように固着している、それを引っぺがしたいのが健忘が機能しない、ことあるごとにフラッシュバックする、あなたは憂いに沈んだ表情でとつとつとそう語るがそれはあなたではない。あなたが持つできごとであり、あなたの経験した記憶であってあなたではないのだが、あなたはそれはあなた自身に固有のもの、つまりあなただけのものだと思っている。そうではないんだけどな、おかしいな、わたしはそのことを何べんも何べんも聞いてきた。

O ねえ、ちょっとは黙ってられないの？

A いずれむつつり黙りこんで呆然と太陽を見上げるときがくるだろうさ、でも、今じゃない。

O うんざり。

A 実は、わたしもちょっとぴりうんざりしている。あなたはあなたのことと憂う必要がない。生きていくからとか希望があるからとか友人がいる恋人がいるしあわせ

だからではなくあなたは存在してここで世界を見つめているから。わたしもいることだし、ここにはあなたのものだけでない目がある。ほかに憂うべきことはたくさんある。ありすぎてちよっぴりうんざりしている。わたしはただ、あなたのつまらない話を聞きたいだけなんだ。

○ 話すことなんてない。わたしに。わたしにはなにもない。つまらない人間。あなたもわたしもつまらない。

A それならおもしろい話を――

○ もうわたしは死んだ。あなたが疑ったから。

A は目を覆って空を見上げ微笑み、A A が驚きおのいて立ち上がる。

A A ぼくが疑った？ あなたを？ 死んだ？ あなたが？ どこで？ なぜ？

わたしの知らないあいだに、死んだ。

○ ええ。すっかり。秋ね。誰もがいちばん好きでもう消えてなくなった季節、あなたは疑った。わたしの言うことを、やることを、なにもかも。

A A ぼくはあなたを信じている、あなたが嘘だと思って嘘をついてもここでは嘘じゃない、そうやって生きてきたのに。春がやってくる。すべて白日のもとにさらけだして、日に焼けて、色あせて、ようやく形をとる。

風は吹かない。音楽は流れない。

○ 身震いがする。わたしはそこにいなかったじゃない！ わたしはそこに存在していなかったじゃない！ それでも信じたい？ あなたがわたしを消したんだろ、でっかい頭も短い足も低い鼻も紫色の歯茎も！

A A あなたのそれらすべてを愛していた。特に微笑を。足の甲に浮かぶ血管を、
間欠泉を、微笑をつくる唇を、変幻自在な目、突き刺す目を。

O 知ってる知ってる、あなたはわたしのすべてを愛していた。す、べ、て。でも
あなたはわたしを疑ってわたしは死んだ。

A A ぼくのせい？

O あなたのせいじゃない。わたしは死んだの。ただ、ふつうに、よく言われるよ
うにぼっかりと。

A A あなたはそこにいる。

O わたしはここにいない。ここってどこ、なぜここにいなきゃならないの。

A A あなたのすべてが見える。ほら、脂ぎった手を握ることができる。ぼくはし
あわせ。

O それはよかった。そのままでもいい。わたしはそういうわけにはいかない
から。あなたの手の感触も忘れてしまった。あなたはそのまま死んでいけばいい。
死にそうになったら教えて。そのときはなにがあっても、なんとかしてそこにいく
から。あなたを信じて、あなたがなくなることを知りながら、あなたの細長い影
が消えていくのを瞬きせずに見つめながら、わたしがわたしであることをやめなが
ら。

A A そうして。

O さよなら。

A A ぼくはあなたとともにいることができなかった。時間軸が移った。同じ時間
が異なる時間になった。手を伸ばしても触れられなくなった。目をあげてもそこに
はあなたがいなくなった。涙が流れてしつこいしみをつくった。全身に力が入らな
くなった。色が薄まっていまや灰色と黒になった。風景はなじみのないよそよそし
いものとなった。

A Aは素早く立ち上がり、舞台上を駆け回り、いずれO Oのいる木1のところへ落ち着く。

A わたしは悲しい。いよいよひとりになってわたしはあなたとともに朝、目覚める。妄想も幻想も幻聴もなくあなたがそこにいないとわかっていながらも生きることを始めた。人間は何度も生き直すことができる、つまり何度も死ぬことができる。わたしはそれを知っている。わたしは悲しい。文法教則用の文句はきまってる。わたしは、いったい誰がこんな腐った文句を言わせやがる！

O わたしはあなたに信じられなかったことが悲しいのではない。あなたがわたしの言うことを聞くとうしろに信じられなかったことが悲しいのではない。あなたがわたしがわたしを疑ったということ、あなたがわたしのことを信じていることができない理由をわかりすぎるほどわかっていたのにその理由をぶち壊すことができなかったこと。信じられなければ疑うのは自明なの？ あなたはわたしのなかの四分の一だったのに。ここにあるのはなにもない灰色の空。

A おかしいな、ネガポジ反転している。この混同はまずい、ちょっとしたことですぐにこうなる、わたしはあなたではないし、あなたはわたしではない。あなたは「あなたはわたしのなかの四分の一」と言うが、わたしがあなたの四分の一ならば、あなたはわたしの四倍、あなたはわたしの四人分ということだ、なんてことだ… わたしを四つ裂き、いや、四散させてどうするつもりだ。

O わたしがわたしを愛しているからといってあなたを愛しているわけではない（息を呑む）。わたしとあなたは四人なの。でもわたしが死んだから、あなたはひとりね。

A まだ言っているのか。

○ 物語の進行上、わたしは死んで、あなたはひとりになったほうがいいの。引き止めてくれる重しをなくした。もう何度、わたしは殺されてきたことか！

A 大丈夫、大丈夫： まだ言わなきゃならないのか、いつまで言いつづければいいんだ、口から土が吐き出されるようになるまでか。過去だ。あなたが過去を持つていて、そこから都合よく切り取って現在に： つまりここではその現在はわたしなんだが、パッチワークしてぴったり、あら、きれい、これで決まりねってなぐあいいはまって嬉々としてわたしを疑っていまここにいるわたしをあなたの過去の亡霊、分身でもどっちでもいい、わたしはそのたびに寝こみをスポットライトで照らされたように感じたね、光を押しつけるのは唾を顔に吐きかけるよりたちが悪いのに。このときほどわたしがわたしでなくなることを感じる瞬間はない、わたしはここにいない、わたしにはいまがない、大海原のど真ん中で鮫に足に噛みつかれながらあつぶ、あつぶと言ってブイに捕まっている、そして夢から覚め、吐き気がする。いま、わたしって何回言った？（木3に問いかける）わたしが存在しなくなるというそのときにわたしはずっとわたしは、わたしは、と言いつづける青春真っ只中の高校生になって、あなたの思い出したくもない過去をこの脂で黄ばんだ指でなぞる： いつも思っていたよ、あなたに証拠を差し出せれば！ 手のひらにのせて、ほら、見てごらんよ、それはこれで、あれではない！ ってね。こうしてひとりはふたりになる。

浮浪者がよろめきながら一人の屍を背負って運んでくる。その後ろを蠅がうろついている。

浮浪者 もう、なにも、動かなくていい：

蠅 なぜこいつを運ぶ？

浮浪者 こいつが死んだからさ。

蠅 こいつのこと知らないのに？

浮浪者 スクランブル交差点ですれ違っていたかもしれない。おれたちはいつもどこかですれ違って、別れている。わが空しく過ぎし青春。ああ！

蠅 だからってこんな臭いもの運ぶ理由にはならない。

浮浪者 こいつだって死にたくて死んだわけじゃない。死にたくて死んだやつだって誰かが運ばなならんだろう。みんな埋めて土に還してやる。見知らぬ輩の卵でびっしりになるまえに。

浮浪者 それはもっと親しいやつがすることじゃないのか？ こいつが死んだことを信じられないやつらが。こいつがあいつならわかるが。

蠅 おれはこいつが死んでいると知っている、それで十分だ。

浮浪者 明日もまた。

蠅 ここに。

浮浪者 ああ！

浮浪者は穴の手前まで来ると突然、背中を銃で撃たれたかのように両腕を拡げ、屍を落とす。屍は想像もつかないような奇怪な姿勢で横たわる。

屍体 ああ。

蠅 何も言わずにものを落とすな。かわいそうだろう、これもおれも。

浮浪者 限界だ。持っているやつはもっと与えられて、持っていないやつは奪われつづける。

蠅 おまえはいつたい人間か？ 自分がどこにいるのかわかっているのか？

浮浪者 目印と土さえあればいい。おまえはそんなことも知らないのか。誰だって

知ってるのに、おまえは知らない、そういうことが多すぎる。いやになっちゃうね、まったく、くたくただよ。

蠅 おまえは余計なことまでしゃべりすぎる。おれはおまえと話したくない。おれとおまえは噛み合わない。おまえはここから離れて行け。

浮浪者 それにしてもだ、重荷がひとつ――

蠅 なくなったな。それで、いくらもらえるんだ？

浮浪者 もらいは少ない。

蠅 泣いてもいいか？

浮浪者 いいぞ。思う存分、泣け。

蠅 (天を見つめて両腕を広げて) だめだ、何も降りてこない。

浮浪者 神さま、かれに涙を。やって。ちょうだい。

蠅 泣きたかっただけなんだ。こいつを知っているような気がして。

浮浪者と蠅は、笑い、すぐにやめて付かず離れずで徘徊する。タツコが上手から現れる。

タツコ やあねえ、迷っちゃった。いったいどこなの、ここは。ねえ、あなた。

(歩いている浮浪者を呼び止め、肩を掴む)

浮浪者 ああ、なんだ。

タツコ 病院に行きたいんだけどね、知らないかね、場所を。(浮浪者は下手を指差す)

タツコ ありがと。(かばんからハンカチを取り出し、顔中の汗を拭い、歩き出し、屍体を見つけ、足を止める) あら、何かしら(屍体をまじまじと見つめる) 屍体！(ハンカチで口を押さえる) やあねえ… 誰かしら。こんなところに。(軽く

お辞儀をし、手を合わせる）時間がないわ。早く行かなきゃ…

タツコは下手へ退く。

木1の前でうつ伏せになっていたOOが目を覚ましてからだを起こし、奇抜な姿勢で横たわっている屍に気づいてそちらへ歩いてゆき、再び横になり、頬杖をつきながら屍を眺める。

OO 生きているの？

屍体 （顔は床に突っ伏したまま）死んでいるに決まっている。魂抜けてとぼとぼふらふら。ここまで来れたのはあいつらのおかげだが。

OO でもこうやっておしゃべりしているから、あなたはまだ生きています。

屍体 わたしの後ろを見てみる。蠅が仲間を呼んでいるだろう。

OO 一匹しかいない。なんだか、浮遊感を楽しんでいるみたい。

屍体 ほじくって穴をあけて卵を産みつけたいんだろう。わたしの真っ黒に焼けた、いや、水ぶくれだらけの皮膚の中に。第二の人生が始まるのか、わたしの身体はもう動かないが、水の上なら流れていく、沈むことなく浮かんだまま漂って太陽に光をもらって無数の卵を孵してやる。かれらはそこから別のところへ飛び立っていく。わたしもいっしょに… あんたわたしなんかと話していいのか。

OO いいの。どうでもいい、あ、ん、な、お話（床を思いつき叩く）。ねえ、触ってみてもいい？

屍体 どこに？ わたしのからだに？

OO あなた。

屍体 いいも悪いもない。わたしがだめだと言ったらあんたはわたしに触らないの

か？

〇〇 そう。

屍体 まるで生きているみたいだ。でもあんたが触ろうが触るまいが、わたしはそれに対して反応できない。

〇〇 やってみなきゃわからない。

屍体 触ってくれ。思う存分、気の済むまで触ってくれ。

〇は屍の身体の線を撫でるように触り、奇怪だった姿勢を自然なものに戻し、うつ伏せだった身体を仰向けにする。浮浪者は木4の前に落ちている椰子の実を拾う。

屍体 なにも感じない。なにも見えない。はずかしい格好で横たわるわたしの身

体。それ以外はなし。肌に開いた無数の穴は呼吸を止めて。耳と口だけ。聞こえるのと話すことだけ。光はない。いつまでも真っ暗。あんたはわたしに触れた。朝か夜かはわかる。

〇〇 どっち？

屍体 どっちでもない。どちらかといえば夜で、夕方から夜にむかうあいだ。

〇〇 そう。あなたは自分で死んでいると思っっている、でも、あなた、やつぱりまだ生きているのよ。だって死んだら川で水を飲まされてみんな忘れちゃうんだから。誰かと話したことも、楽しかったことも、絶望も、顔も、名前も、ことばも、ぜんぶ忘れちゃう。あなたはちがう。立派なことじゃない、聞いて、話すことができる。たいしたもんよ。ほら、笑いなさい。

屍体 あんたはまぎれもなく生きていて五体満足で無責任だ。

〇〇 あたしだってどうだかわからない。くそくらえよ、人生なんて。じゃあ、またね。

不規則な軌道で屍に寄っていく蠅を〇〇がつまむ。

蠅　ひとおもいに潰してくれ。あんたの手は汚れない。

〇〇　またそんな大ぼら吹いて。あたしがあなたを殺せると思って？

蠅　殺せるだろう。そのひとさし指と親指をくつつければおれはそのあいだでねとねとした粘液にくるまれて潰れちまう。やっときき、一卷の終わり、どうせまた一周回っておれは蠅だ、何度でも殺せ。

〇〇　前のことなんてすっかり忘れているくせに。あの屍体においてに惹かれてやってきたんでしよう？　ほら、行け。（蠅を離す）

蠅　おれは、できることならこんなことしたくないんだけど。なんであんな丸焦げの、鼻もげの、激臭におびきよせられなきゃならない。おいしいに決まっているからなんだが、でも、今日はあんたに殺されかけたからか、気が進まないんだ。

〇〇　なら、あそこの胡乱な人は？

蠅　あいつは見たところ、びんびん飛び跳ねているようだが。

〇〇　友だちになりたい？

蠅　おれはあんたと友だちになりたい。今までおれとこんなふうにしたやつはいなかった。できればもっと話がしたい。あんたと話ができるなら、おれはもう飯なんていらぬ。

〇〇　あとでね。あたしもあなたみたいな人、初めて。お話したい、あとでね。

〇〇は〇の隣に腰を下ろし、蠅は浮浪者の元へ行く。

蠅　あの人を敵だと思うか？

浮浪者 おれが汗水垂らして運んできたものに語りかけてるぞ。また運ばなきゃならなくなる。

蠅 いや、運ばなくていい。蒔くヒト、食うヒト、別のヒト、おまえの仕事は終わったんだ。もうその時点であれとは関係がない。もうおまえの手を離れ、遠く離れて、いつかまた思い出すかもしれないが、どうでもいい、放っておけ。

浮浪者 気に入らないな、あの人は善人に見えておれたちは悪人に見える。

蠅 誰がそんなこと言ってやがる。

浮浪者 おれだよ。（自分の鼻を指差す）

蠅 おまえか。おまえがおれのことを悪人呼ばわりするの。同じ穴に落っこちているの？ おまえだけ善人ぶってあいつに加担し、あれに同情しているふりをするのか。（浮浪者に殴りかかる）

A A （通りかかって）おまえたち、暇を持って余して、かわいそうに。他にやることはないのか。家に帰らなきゃ。

浮浪者 蠅だ！（手で払いのける）おれは蠅にたかられている！（頭を抱える）なぜなら、おれは働きすぎて汗臭いから！（鼻をつまむ）おれは蠅を殺す！（匍匐前進する）なぜなら、目と耳に悪いから！（うつ伏せになって両手で頭を押さえる）

蠅 （動きを止めて）おまえにおれは殺せない。おれにはまだすることがある。おまえは家に帰れ。もう用は済んだ。

浮浪者 （顔を上げて飛び上がる）おれに家があるとでも？ おれたちはつくつた、それを、自分たちが住むためではなく、誰か住みたいやつらが住めるように。でも、誰も住まなかった。敷居をまたごうともしなかった。ぴかぴかに磨き上げていたのに、指一本触れずに素通りしていて、せせら笑っていた。誰がこんな家住むかよって感じでな、おれたちは同じところに住んでいた。

蠅 おれたち？

浮浪者 おれにだって友人はいた。眺めのいい川べりだった。おれはそこがいちばん好きだった。ゆるやかな流れはいつも同じ方向へ、ゴミも光も鳥も魚も人間もみんな流れていく、おれたちは楡の木陰、緑の芝生のうえで寝っ転がって、その行き着く先を想像する。まわりは道路に囲まれていて臭いし汚いしうるさいし、川の水だって汚れていたが、あの流れを見ていればなんともない。ああ、夜だ、もうすぐ夜だ、おれたちはその日拾ったものをそこに持ち寄ってその日のできごとをしゃべりながらだれかの残飯で腹を満たしてしけもくを吸って安酒を浴び、眠った。よかつたら家にきて食事でもどうかな。（ポケットに両手を突っ込み、差し出す）ほら、パンだ、カビパン、いや、うぐいすパンだ。

蠅 食欲がない。なにもいらぬ。ただ話がしたかっただけだ。そう、おれは蠅じゃなかった。おれは蠅じゃないんだ。おれのでかてかした背中には使い古しの油がべったりとこびりついている。それは何の役にも立たず、ただ染みついていてただだ。そうやっておれはずっと蠅だと思ひこんでいたが、蠅じゃないことによりやく気づいた。おかしいと思つたんだ、おれのほかに蠅なんてどこにもいないじゃないか。ここにとびつきりのご馳走があるというのに。ああ、まだ、遅すぎるということはないだろう。（浮浪者が笑う）

Aは木3の前、A Aは木4の前に佇み、OとOOは立ち上がって遠くを見つめている。

A 問題は外からやってくるものだった。それにうまく対処することだった。あたり一面、計算問題だらけだった。

O 海！

屍体 海か。もう水はまっぴらなんだけどな。腐るほど飲んで腐った。

A じゃあ、ここは浜辺か。誰がこの木を植えたんだ。それともひとりでに生えてきたっていうのか。見捨てられ、ひとりきりで。いや、ひとりきりということはない、酸性雨が降り、土が抗い、木の内部が中間地点を見つけてそれを取り込んだ。

AA (海に向かって石をサイドスローで投げながら) むかし、からこの木たちは、ここにいて、いま、海が、還ってきた、波が、寄せて、寄せて、太陽が戻って、きたぞお、水平線の向こう、から、水の上で、てんてんつぶつぶきらきらちやぷちやぷ、ゆらゆらと親しげに戯れている、光を見ている、と、ぼくはいつも、ばらばらに砕け、それぞれの重みで、沈み、浮かび、あなたの手が、あなたの手が、その、ばらばらを掬い上げた。

OO いいえ、まだ、ここには海はない。少なくともまだ、あれは車たちが雨に濡れた道を滑走する音よ。みんな、車で来たんだね。

A、AA、O、OOはそれぞれ息を吐いて波の音をつくり、調和し、不協和音が混じり始めたところで沈黙し、残響に耳を傾ける。

蠅 (動くのをやめて) 波の音が聞こえる。

浮浪者 薄気味悪いな。また晒しものが出てくるぞ。

蠅 ああ、もう、海にはうんざりだ。生か死かなんて問いは。

浮浪者 そのあいだに広がる海の大きさ、中間色の豊富さったらないからな。あ

あ、これでやつともう終わり、ほっと息がつける、かと思ったらこうやってまた波が寄せてくる、さあ、これからだ、立て、出発だっけるときにはするするするっと波が引いていく、そうなりやもう腰を下ろして、じっと黙って、ずっと観察するだろう？

蠅 すると途端に呑みこまれちまう。お決まりの構図。でもあんた川の流れつく先

を想像していた、と言っていたじゃないか。

浮浪者 想像しても、想像がつかない。いつも、またふりだし。いまだにわからんよ、どうやって遊べばいいんだ。

蠅 よき道づれはいないのか？

浮浪者 死んじまった。朝、目を覚ましたら冷たくなってぶるぶると震えてやがる。もうそのときにはこと切れていた。ざらにあつたな、んなことは。

蠅 コーラ持ってないか？

浮浪者 ああ、この上着の胸ポケットのなかに… ないな。腑抜けになったから捨てちまった。

蠅 腑抜けのコーラほどみじめなものはない。しかし、喉が渴いた。こう暑くつちや、たまらないな、まったく。

浮浪者 椰子の実は… (椰子の実に何とか穴を開けようとする) だめだ、まったく強情で、なにも言わない。(椰子の実をその場に落とし、あらゆるポケットを探る) ああ、ビー玉ならあった。ほら。(ビー玉を蠅に放物線を描くように投げる) 蠅 ああ、ありがとう。(もらったビー玉を口に含め、すぐに吐き出し、客席へまっすぐに投げる) 何の慰めにもならない。この世界はこんなもんばかりだ。

蠅は舞台後方のカーテンをめくりつつづける。

Oは木2の前に座り、AはOの隣に座る。

O ねえ、ここがユートピアなの？

A 突然、何を言い出すんだ。わたしはあなたが突然にか突拍子もないことを言い出すのが好きなんだけど、それは誰の入れ知恵なんだ？

○ あなた。ここから逃げなきゃだめだ、ここにいたら気が狂ってふたり抱き合いながら糞に頭から突っ込んでしまう、まわりを糞で塗り固められて外に一步も出られなくなる、どこでもいい、いや、どこでもよくはない、よそへ、って。

A 言った、かもしれないな。わたしたちはどこにも行けないが、どこかに行く。

ここは… 空虚で、なにもない、という点ではユートピアだが、ユートピアは馬の鼻先にぶら下げられた人参だ。

○ あそこからどこかへ行くならもっとましなところ、もっと心地いいところ、もっとくつろげる穏やかなところへ行くもんだと思ってたけど、ここはさして変わらない。

A わたしたちはそう遠いところにはいないんだよ。

○ ここは静かだけど、なにもない。こわい、このままここでそっと横にならずっとそのまま動けなくなるなんて。ここには心休まる家もない。

A 家なら建てればいい。いつまでも、おだやかに、平和に目を閉じるまでいられるまでいられるとは限らないが。ここにだっていずれやってくる。結局、わたしたちは逃げるのを忘れてここにいる。

○ そうね。すっかり忘れてた。だんだん思い出してきた。

屍の前で足を前方に投げ出し、両手を後方についてくつろいでいる○○とその隣で同じ姿勢をとるAAが割って入る。

○○ あたしは海と芝生と温泉さえあれば家なんかなくてもいいけどな。

AA のんきなもんだな、あなたは。

○○ わたしたち、いずれ死ぬのは変わらない。この人みたいに。

AA もう死んでいるかもしれない、もちろん、いい意味、いや、いい。

屍体　なあ、わたしの子ども、ミナ、ミナがどこにいるか知らないか？　妻もだ、ああ、かわいいアキ、アキはどこにいるんだ？　むかしの檻褌衣はまだ残っていたか。アキとミナにはどうだ？　なぜわたしはここにひとりで？　わたしは怖いんだ、なぜあるときあしなかったと自分と他人を責めるのが、またあの間違いを犯していることに気づくのが、こうしているあいだにもわたしは話せなくなってこのまま知らぬ間に消えていくのが、わたしは怖いんだ。この期に及んでおれはまだ怖がっている、なんて不幸なんだ！

〇〇　聞いてくるね。

〇〇が立ち上がり、蠅と浮浪者の元へ軽く跳ねるように歩いていく。

〇〇　ねえ、あの人の子どもと奥さん、どこにいるか知らない？

浮浪者　知らないな。

蠅が〇〇の声を聞いて、カーテンをめくるのをやめて戻ってくる。

〇〇　ねえ、あの人の子どもと奥さん、アキとミナっていうんだけど、知らない？

蠅　知らないな。

浮浪者　もう見分けがつかないんだ。ごろごろと山積みにされて。

蠅　なぜあいつだったんだ？

浮浪者　おれはそのうちの一体をどこへでもいいから運べと言われてぶらぶらしてたらここに着いたってわけで。

〇〇　誰が運べって言ったの？

浮浪者　役人に決まってる。あいつらは仕事の分担が得意だからな。おれたちの仕

事には必然性がある、そこには数えきれないほど骸が無数に転がっていてそこにはそれらをすべて埋めるだけの国土面積がない、誰かがよそへ運んでやらなくちゃいけない、もらいが少ないのは死者の体面を保つためという名目らしいが、あまりにも数が多いもんだから恐れているんだろう。おれはもうこいつだけでうんざりした。もつと軽いのかと思っていたが、重いなの、とてもひとりで運べるもんじやない。運んだけど。

蠅 浮浪者でも役人に仕事もらえるんだな。

浮浪者 むかしのごだごだはこっちで水道水できれいにすすいで川に流して太平洋に任せておくからいま苦しめ、つてな。

〇〇 ご都合うるわしいね。

蠅 おれも手伝ってやればよかったんだが。

〇〇 あなたはどうやってここに来たの？

蠅 おれは、生まれたころから似たようなやつらに囲まれていて、同じ飯を食って、交尾して子どもを産んで、ずっと同じ生活の繰り返しだった。いつ殺されるかわからない不安は生まれたころから絶えず付きまとして、あらゆる手の動き、武器の軌道を予測して速度、方向をすばやく変えられる身体にならなげきや、死ぬ。それは代々受け継がれていて、できないやつはすぐに死んだ。

浮浪者 大変だな。似たようなもんだが。

〇〇 あたしはもう死んでたかも。

蠅 だんだんどいつもこいつも似たように思えてきて、その集まりにいるやつらが誰でもない、みんなヘルベチカで、同じ顔で、それが本当は嫌なのか、そいつらは自分のことばかり考えていた。

〇〇 普段は何を食べているの？ 残飯？ 死骸？

蠅 絶望だよ。それがいちばんうまい。

〇〇 死んだお母さんが聞いたらなんて言うか！ 悪魔！

蠅 おれは裏口から忍びこむような真似はしない。姿をくらしはするが、でなきや殺される。

浮浪者 そんなにみんな絶望してるのか？

蠅 絶望中のからだにおれたちが口づけ、卵を産む、すると絶望は薄まって希望になる。そういうもんだろう？

浮浪者 俗にはな。でもあんたたちの媒介とはね。

蠅 悪いやつらはそこにウイルスを持ち込んでいっしょくたに死なせるがままにする。

〇〇 二番目においしいのは？

蠅 絶望しているやつを見て自分は健康だ、大丈夫だ、元気を出せって言い聞かせているやつら。

浮浪者 結局、絶望ってことだな。

〇〇 ほんとに絶望しているヒトと、ただ絶望絶望言っているヒトとは区別がつくの？

蠅 簡単だ。顔を見ればわかる。

〇〇 うさんくさい。

浮浪者 じゃあ、おれはどうだ？

蠅 あんたは絶望していない。あんたも。

〇〇 そうね。

浮浪者 そうだな。あいつのところへ行こう

蠅、〇〇、浮浪者はAAとともに屍のまわりに座り、屍の顔をのぞきこむ。

浮浪者 どうだ？

蠅 いや、顔がないから…

屍体 なんなんだ。

〇〇 あなたは、その、絶望してる？

屍体 このざまを見ろ、肌は黒焦げ、ぶよぶよにただれ、凹んだところが突き出し、突き出たところが凹んで――

浮浪者 そんなにひどくないぞ。においはするが――

屍体 手も足も動かせず、なにも見えず、光はない、見知らぬ好奇の目に見られるがまま、もはや人間じゃない。どこにいるんだ、アキは。ミナは。思い出はどこにいった！ もうわたしが消えて、アキが消えて、ミナが消えたとなれば、わたしたちの思い出はどこにいくんだ！ わたしたちの中にしかないなんてそんな馬鹿なことがあるもんか！ ふざけるな！ あいつはいまも生きていて、空からおれたちを見下ろしているか、どこか暗い穴蔵で最後だと勘違いしてしまうぐらい淡くて朧な光を携えて身を潜めている！ それを消そうとするのはいったい誰だ！

A A まあまあ落ち着いてください。内臓が飛び出ますよ。

浮浪者 もっとやさしいことばをかけてやったらどうだ。

A A それは生きているヒトの論理で、ひどい欺瞞だ。

浮浪者 でもこいつは思った以上に弱っている。

〇〇 あなたは自分で言うほど醜くない。

屍体 気休めはよせ。同情はやめてくれ。腐った肉を温めるな。

A A 同情するほど落ちぶれてない。

〇〇 質問が悪かったね。ごめんなさい。（蠅に耳打ちで）食べないでね。

蠅 わかった。おれはもう蠅じゃないんだ。食わないよ。

〇〇 この人たちはアキとミナのこと知らないみたい。ふたりは、生きているかも

しれない。わからない。

浮浪者 何歳なんだ。

屍体 わたしは三十五、アキは三十二、ミナは五歳。

蠅 身長と体重は？

屍体 わたしは百七十五、六十七、妻は百六十二、四十七、ミナは百二十、二十。

浮浪者 どこに住んでいたんだ。

屍体 清澄白河。

蠅 清潔で。

浮浪者 おしゃれな。

蠅 アメリカ・ザリガニたち。

浮浪者 なぜ東京から抜け出さなかった？

屍体 わたしには仕事があった。くそつたれな仕事だ。

浮浪者 仕事は？

屍体 コンサル。

浮浪者 なんだ、それは。

屍体 わたしは失敗した。それがアキとミナのため、わたしたちがしあわせな食卓を囲むために必要だと。思い込んでいた。足場板はすでに腐って、奇妙な音を立てていて、今にも底が抜けるところだったのに。わたしは空ばかり見上げて今日の天気を気にしていた。

A A それで、なんでこんなことになったんだ。

屍体 いつのまにか火に包まれ、押し潰され、流され、焼かれ、聞くに堪えない叫び声が溢れかえって、ふたりに会うことなく。

O O あまりに現実的ね。

A A お願いだ、話しをつづけてくれ。

屍体 わたしはずっとあいつらが悪い、わたしたちは悪くないと思っていたが、それこそ、その安易な思いこみがあいつらの思う壺だった。自分たちの不遇にかこつけていいと悪いを選別してみすぼらしい小宇宙に閉じこもるようにするのがあいつらの狙い、自分たちの手で自分たちの首を絞めさせるため、自分たちの手で自分たちを守ることを忘れさせるため、自分たちの手で自由を勝ちとらなければならぬということを考えさせないために、わたしたちの場所は確保され、制御されていた。ヒトそれぞれ、それぞれにそれぞれの場所を。それは透明な水の中に浮かんでいるような心地いい響きだった。みんな同じような顔に見える、みんな同じようなことを考えているのに、ヒトそれぞれ。それでお話はおだやかな終わりを迎え、平和な日常はつづく。程のいい出口の先には糞だらけ……異変はすでに起こっていたのに……他愛ない話をして楽しんでいると思っていたらいつのまにか愚痴と不満ばかりになって黙りこむ、その繰り返しだった。たしかにわたしたちは疲れていた。視力は低下し、腰が回らなくなり、肩は石のように固く、口は開きっぱなしだった。それでもこの小宇宙を維持し、もちろんそこには笑いもしあわせもあったから、そのために生きていればきつとなんとかなる、と、突然、天井の高いワンフロアが揺れ始め、また地震かと思ったが、その揺れは長続きせず、不規則に断続的に多発し、ものが倒れていった。みんな訓練していたからすぐにマニュアル通りに逃げようとしたが、そこには予想を上回る数の人たちが殺到していて、身動きがとれなくなった。身動きがとれなくなるとヒトはパニックに陥り、自分の意思で自分のことを考えられなくなってその動きが伝染する。賢明なのはその群れから抜け出すことで、わたしはそうした……もういいだろう。

AA 辛いでしょう。誰だってもう考えたくない、口を閉ざして時が過ぎるのを待ちたい。でも、あなたが語らなければ誰もなにもわからない。

屍体 わたしと似た経験を持つ人たち、わたしよりうまく語れる人たちは他にもた

くさんいる。わたしでなければならぬ理由がない。

AA あなたがここにいるから。わたしたちの前にあなたがいるから。

屍体 わかった、わかった。もう怖いとか辛いとか言うのはやめよう、どうせ暇で、死んでるんだ、話をつづける。でも、たしかではない。間違いは必ずある。無条件に信じて神話化するのはやめてほしい。

OO わかった。

屍体 煙が充満し始めていて、通路には何人もの人たちが倒れていた。わたしはまぎ出口を探して、それを見つげ、走って、外に出ることができた。外は、ひどい有り様だった。デモンストレーションだった。わたしたちを殺し、わたしたちと同類の人たちを怖がらせるための。

浮浪者 おれもそれ、見たぞ。

屍体 信じられないかもしれないが、わたしはそこで、舗道の真ん中で眠りに落ちたんだ。

浮浪者 信じられない。

蠅 防衛反応か。

AA 聞こう。

屍体 夢のようだった。夢の中にいたのかもしれない。眠っていたのか、覚醒していたのか、半開きでぼかして眺めていたのか、わたしにはわからない。わたしだって信じられない。火のついたビルからは救いを求めて幾多もの手が窓から突き出ていて、重力に従ってガラスや紙、瓦礫、人がそれぞれの重さ、それぞれの速さで落ちてきた。道は人と車で溢れかえっていた。流れはなく淀み、分裂と衝突が頻発して、いま、わたしの耳は聞くことができるのにそのとき、そこではわたしの耳は何も聞こうとせず、殻を閉じてしまい、ありえない現実を目の前にして目を覚ますどころか、わたしは眠ってしまった。無意識のなす防衛反応、圧倒的なものを前にし

ての圧倒的な無力感、心身喪失、なんとも言えるが： わたしは、なにもできず、なにもしなかった。近くには多くの助けを求める顔、顔、顔があったのに、家にはアキとミナが不安で押し潰されそうになっていたのに。

AA それで、いつ目を閉じた？

屍体 痛みがない、感覚がないんだ、なにがどうなって自分がこんな状態になっているのかはわからなかった。ただ燃えさかるビルのあいだにのびる道路のむこう側で白く光るものが見えて、次の瞬間にはわたしは白に包まれて、光を失った。そのとき、気づいたんだ。わたしだけじゃない。ここで眠っているのは、わたしだけじゃない。そのあと、わたしたちはは屍体として収拾され、一箇所にまとめられたんだろう。

浮浪者 そう。数えきれないほどの重なりとなって。

屍体 もういいだろう。埋めてくれ。そこに穴を掘って。

浮浪者 すでにそこに穴はある。だからおれはあんたをそこに降ろした。

蠅 落とす。

浮浪者 まだ落ちていない。

屍体 話が早い。埋めてくれ。もういい。どうせわたしはこのまま動けず、腐って、散り散りになって消えていくんだ。アキとミナを抱くことも、顔を見ることもできない。もう何も聞きたくない。もう何も話したくなんかない。ただ黙って静かに死んでいく。埋めてくれ。

AA たとえあなたが死んでいるとしても、声が聞こえている、声が聞こえるかぎりそんなことはできない。

OO わたしたちはいつかはそうしなければいけないけど、いまじゃない。まだ小さな橋が架かっている。

浮浪者 でもこいつは埋めてほしい。土を喉につめて息を止めてほしい。天井にひ

っそりとはまった天窓を見せてほしい。最後の願いだ。

蠅 自殺したいとは思っているがいざやろうとしてみると震えが止まらずに自殺できないやつと似ているが、動けないあなたは本当にできない。

屍体 わたしの聞きたい声は、これまでずっとわたしに語りかけてきた声は聞けない。

〇〇 待ってればいい。

屍体 埋めてもらって、息ができなくなって、ようやくわたしは死にきって、もうここからは脱出して別の世界の入り口へ、そこで会えればいい。ここで待つよりそこで待つほうがいい。

AA 別の世界なんてものはない。出口なんてものはない。不幸だと思い込んでいる者たちが大切そうに胸に抱える甘酸っぱい蜜をあんたも舐めたいか。ここそこは地続きで、見えはしないが、聞くことはできる。

〇〇 待っていることはできる。埋めたらからだがなくなっちゃう。音楽も聞こえなくなっちゃう。待つことは、絶望ではないこと、死なないこと、苦しむこと、耐えること、退屈なこと、待つものがある、それはまだ救いがある。

屍体 埋めてはくれないということだな。ならばもう、ほうっておいてくれ。何も聞きたくない、何も話したくない、ほうっておいてくれ。

〇〇、AA、蠅、浮浪者はその場を離れる。浮浪者は木1に寄りかかり、蠅は浮浪者の置いた椰子の実のうえに乗る。〇〇とAAはピアノのような声で同じ音階の和音を一秒ごとに発しながら自由に歩きまわる。

屍体 あいつらは埋めてくれない。わたしはひとりで、自分の力でこの穴の中に入ることさえできずに、何も見えないまま空を見上げている。そこに空はあるのか？

アキ、ミナ、おまえたちはもうそこにいるのか？ ああ、なんとも悲劇的な調子……
あいつらが絶望なんてことばを持ち出してくるから。ことば、ことば、だが、呼びかける、ことばは呼びかけるもの、ものを名づけ、呼びかける、それがことばの本質的な機能だろう。わたしが呼びかける、アキ、ミナ、元気にしているか？ 飯は食ってるか？ 痩せちゃいないだろうな、金はあるのか？ ああ、ペペ、ペペ、すまない、すっかり忘れていた、ペペはどうしてる？ 膀胱炎をこじらせてなけりやいいんだがな、いっしょにいるのか？ わたしみたいになっちゃいないだろうな？ …… こうやってわたしたちは、はなればなれであることがわかる。どれくらい離れているかはわからないが、そんなものは問題じゃない。はなれていなきやこんな馬鹿な真似、せずに済む。こうやってずっと呼びかけつづけていれば、毎日毎日、あっちから太陽が昇って、こっちに沈む、その繰り返し、その中でだんだんとそのあいだの距離に慣れてくる。橋の長さは変わらず、固定されて。時間が経てば忘れる？ 時間が癒してくれる？ 負け犬の決まり文句だ、わたしの人生なんだっただんだ？ 直線的な時間とともに暮らしてきたわたしの時間はそこで止まり、ぐにやぐにやと曲がりくねり、終いには円を描いてわたしはひとりその細くていまにもちぎれそうな線上を歩いていく。わたしたちの過去は、わたしののろくて進んでいくのか止まっているのかあるいは退いているのかわからない歩みとともに磨耗し、つるつるで彩り鮮やかなビー玉みたいになってわたしの心臓の横に、もうひとつの心臓として、安らかに眠るように血を巡らせ、いつかそれが止まる時、なにもかも終わり、いっさいの終わり、始まりのない終わり、もう呼びかける必要もない。

ああ…… しっ…… 静かに！——

浮浪者 静かだなあ。ほん、つとくに静かだなあ。（あくびする）デルタ波がどばどば出てくる。

浮浪者 いいんだ、ここだってどうせ燃えて朽ち果てる。

〇〇とA Aと浮浪者と蠅とOとAは枯れ枝と朽ちた木片を拾い、舞台前方で組み上げ、浮浪者が火をつけ、火を囲む。〇〇はとA Aは屍体のもとへ行く。

〇〇 寒くない？

屍体 何も感じない。でも、聞こえたんだ。幻聴じゃない。呼び声が。ふたりは必ずここに来る。埋めてもらわなくて、よかった。

〇〇 そう。あっちでみんなで焚き火をしているんだけど、来る？

屍体 火なんて見たくもないが、腐った肉も温めればどうにかなるかもしれない。

たちが悪いことにわたしは可能性を信じはじめたんだ。

A A 悪くない。

A Aが屍体を背負い、焚き火から少し離れた位置に横たわらせる。中央のAの右から時計回りに〇〇、蠅、浮浪者、屍体、A A、Oの順になって焚き火を囲んで座る。

O 来ないね。

A ああ、来ないな。ここに来るように、ここに来ることを検討してみてくださいと伝えておいたんだけどな。

O かれらが来るのをここでずっと待ってるなんて嫌。

A 来るさ、かれらは。わたしたちがここでずっとおしゃべりしていれば。

〇〇 みんな、忙しいのよ。

屍体 そのなれの果てを見る。

〇〇 あなたは運が悪かった、あの時あの場所にいなければよかったのにね、かわいそうに。って言われて元通りよ。

屍体 何万人も死んでいるのに？

浮浪者 数が大きくなればなるほどおれたちは小さくなって小指どころか無限小の円だ。

〇 わたしたちには音楽がある。

A 誰も聞こうとしない音楽が。ああ、頬にほのかに赤みがさして、ほんとうにきれいだ。

〇 なに？

浮浪者 ああ、ほんとに。

蠅 きれいだな。

〇 そう。

蠅 (〇〇の方へ向き直って) あなたもきれいだよ。

〇〇 嘘ばかり。

蠅 あなたには感謝してるんだ。おれになにかあげられるものがあればいいんだけど。

〇〇 ありがとう。

蠅 あんたのおかげでおれは自分は何なのかわかった、いや、自分がそれだと思いつ込んでいたものじゃなかった、それがとんでもないまがいものだったことに気づけたんだ。

〇〇 ほんとうにそれはいいことなの？

蠅 いいことさ。いま思い直しているおれがまた間違っているととしても、それは仕方ない。また間違えればいい。またあんたと話せばいい。

〇〇 そう。

浮浪者 おれたちはあんたたちに話しかけちゃいけないだと思っていた。

○ なぜ？ なぜそんなことが起こるの？

蠅 なんとなくさ、空気が伝わって。

A わたしたちはあなたたちの話を聞き、わたしたちなりに考え、話をした。わたしたちはあなたたちのような人たちを迎えるためにここにいるんだ。

AA とてもそうは見えない、その外見が問題なんだよ。

○○ 気づいてた？

○ ええ。

浮浪者 あんたの顔を見ればわかる、もっと早くあんたの顔をのぞきこんで、焚き火をすればよかったな。

タツコが下手から現れ、浮浪者を見つけ、手招きで呼び寄せる。浮浪者は立ち上がってそちらへ向かい、蠅は距離を置いてその後ろをつける。

タツコ お兄さん！ お兄さん、あんただよ、病院なんてなかったよ。あんた、適当にあしらったんじゃないだろうね。

浮浪者 いや。戻ってこずにそのまま進んでいけばよかったんだ。

タツコ いつまで経っても着きやしないんだから！ お兄さん、これ開けてくれる？（コーラのペットボトルを浮浪者に手渡し、汗を拭う）

浮浪者 はい。（ペットボトルの蓋をあけると、勢いよく茶色い泡がふきこぼれ、浮浪者の股間が濡れる）

タツコ あーあー（顔をしかめ、首を振り、隣に腰を下ろしてペットボトルを奪い取り、ギュビギュビと音を立てて飲み、盛大にげっぷをし、その場に腰を下ろす）
タツコ やんなっちゃうねえ。ほんと。道に迷っちゃってね、だーれもないんだ

もん、やんなっちゃう。(コーラを飲み、げっぷを出そうとするが出ない) ここはどこ? わたしはだれ?

浮浪者 知らないね。

タツコ あら、そう。でね、のどが渴いたらコカ・コーラっていうじゃないの。だからわざわざ買ったのに、あかないんだもん。この蓋が! あたしやこの前、転んで右腕が効かなくなっちゃってねえ。右利きだから不便でしょうがないの。これから病院に行くの。遠いのよ。

浮浪者 もう閉まってるよ。

タツコ 子どもみたいに迷っちゃってねえ: のどが渴いちゃって: 泣きたくな
って: 蓋、あけられないしさ、あいたと思ったら半分なくなっちゃうしさ: こ
んなんじゃ病院に着くまでにのたれ死にだよ。笑えないよねえ。

浮浪者 おつかれさん。(蠅に耳打ちで) コーラだぞ。

蠅 ああ。(タツコの背後からコーラに近づく)

タツコ うちは旦那が死んじゃって一人息子がいるんだけどさ、んもう、うどの大木。ぜんっぜん役に立ちやしないんだから。旦那が死んだ途端に就職したとかいつて埼玉まで行っちゃってね、帰ってきやしない。あたしがこんなに苦労してるってのに電話も出ないしねえ。ちよつと一日だけでも手伝ってくれば大助かりなのにさ、男の子ってのは薄情なもんだよねえ。やっぱり産むなら女の子よ。ほんと、ちよつと重いもの運んでくれるだけでいいのに。仕事が忙しいふりして、お金も入れやしない。いったいなにが忙しいことがあるうかね。何もすることなんてないのさ、ほんと。あ、蠅! (タツコはペットボトルの飲み口に触れようとした蠅を叩く。蠅はその場に倒れる)

浮浪者 ああ。

タツコ もう、やんなっちゃうねえ。で、あたしはどっちに行けばいいの? (浮浪

者は無言で、上手を指差す)

タツコ ありがとう。

タツコは上手へ退く。浮浪者はしゃがんで蠅のからだを小突く。

浮浪者 死んじまったのか？ (蠅は答えず、横たわったまま)

沈黙。

浮浪者 死んじまった。まだいかなんと言っていたのに。どいつもこいつも嘘ばかりついて途端にいなくなる。

浮浪者は椰子の実を胸に抱えて穴の前まで行き、穴の中に椰子の実を落とす。

屍体 静かに。耳を傾けて。もう聞き逃しちゃいけない。

O が立ち上がって、前方を見つめる。

O 海。

O O 朝じゃなくて？

O 海よ。(O O が立ち上がる)

A やっと来たんだな。

O O 呑みこまれてしまう。逃げなくちゃ、早く、逃げなくちゃ。

A A 大丈夫だよ。もう、大丈夫だ。

A さあ、わたしたちはもうここで突っ立って、ただ黙って見ているわけにはいかない。あちらへ向かわなくては。海へ。わたしたちが待っていた海へ。

AAは屍体を背負い、浮浪者は蠅を背負って五人はそれぞれの速度で前進する。

浮浪者 おまえの想像以上の海だぞ。これを見れば、もう嫌だなんて血迷いごとは言えないだろう。

AA 見えるか？ 海だ。

屍体 ああ、聞こえる… 聞こえるとも。

O こんなにたくさんの方が、あるなんて。あなたたち、知っていたの？

《幕》